

夏目漱石『夢十夜』「第三夜」の文芸構造

——「石地蔵」になった「盲目の小僧」——

今 西 幹 一

—

『夢十夜』「第三夜」は、「第一夜」「第二夜」に続いて「こんな夢を見た。」の独立した一行で始まる。この書き出しの形式は「第四夜」を飛ばして「第五夜」に受け継がれ、それっきりになる。初出時に戻せば、一夜ごとに一回の新聞連載だから、「第三夜」は「第一夜」から二日後のことである。⁽¹⁾『夢十夜』という総題があり、前半「五夜」のうち「四夜」で以下の話が夢であることを断ったから、後半五夜は自明のこととして「こんな夢を見た」類の書き出しをなさなかったのか。かつて作品としての『夢十夜』に初めて出会ったとき、現在形と完了あるいは過去形を交える同じ記述法ながら、「こんな夢を見た」の冒頭の有無で、片方は夢の過去として、他方は同時同空間に進行する、現在進行形の事態として受け止められたものである。

そして「第一夜」では約束した百年後の再会を信じて待つ男に、百合に化身して現れる女性、そこに人と人との間の信

頼信義のふくよかな思いを受け止め、「第二夜」では「悟り」がなかなか得られない武士の、焦燥の余り目眩の後の悟りの瞬間を不覚にも見逃す失態を読み取った後、この「第三夜」に来て物語から唆される〈戦慄〉を覚えたものである。いまは〈戦慄〉とは違う異なる趣きを受けるが。

その〈戦慄〉は、何か。夙に伊藤整と荒正人によって指摘されている、作品に潜在する「人間存在の原罪的不安」意識あるいは「父親殺し」の意識の因って来るゆえんであろうか。単に作品を読むに過ぎなかった頃から先行の研究文献に目を通し始めた時期には燦と脚光を浴びていたかに見えたこの両者の説も、昨今はいささか後退し、あるいは否定的にすら受け止められている。その後、諸種の論考が重ねられて来ているものの、典拠ないし材源への考察のほかは、「第三夜」の余り明確な「読み」は示されていないようである。

今回は、文芸初心の段階で受けた〈戦慄〉を軸に、更に見えて来た『夢十夜』『第三夜』の世界の様相を見究めて行きたい。すなわち〈戦慄〉を覚えさせた、そしてそれに加える異趣なものを付加して覚える「第三夜」の文芸構造を分析することになる。

二

六つになる子供を背負つてゐる。慥たしかに自分の子である。只不思議な事には何時の間にか眼が潰れて青坊主になつてゐる。自分が御前の眼は何時潰れたのかいと聞くと、なに昔からさと答へた。声は子供の声に相違ないが、言葉つきは丸で大人である。しかも対等だ。

書き出しの「こんな夢を見た」に続く、最初の段落である。短篇(7)に相応しい、冗長冗漫などとは縁遠い簡潔で、〈親〉と〈子〉の受け応えもてきぱきとした文体である。「第一夜」「第二夜」に続く、そして「第八夜」に及ぶ「自分」を主格とす

る「語り」である。「自分」と「子供」、二人がすべての人物を登場させ、状況設定も申し分のない発端部分である。

ただ時間だけはこの部分の直後に示される。周辺は闇に包まれている。「雨は最先から降つてゐる」との叙述が加えられる。ここでは「慥な事」とそれを裏切る「不思議な事」が語られる。むしろ「不思議な事」だらけである。「自分」にとつての不可知なことばかりである。背負う六つになる子供が自分の子であることは間違いないようであるが、いつの間にか眼が潰れ、頭が青坊主になっている。親である「自分」の承知していないことである。風体は子供だが、声は大人そのもので、言葉遣いもぞんざいでまさに「自分」と「対等」そのものである。何時眼が潰れたかとの「自分」の問いに、「なに昔からさ」と答える。後にくくプロット、ストーリーの展開の伏線になり、深く関わるが、「自分」はこの時点では格別気に留めていない。ここでの「昔」は、子供の出生の六年以前に遡る意を含んでいる。「趣味の遺伝」以来の「父母未生以前」の識閥内である。

『夢十夜』執筆時の明治四十一年は、漱石四十二歳、三女エイが六歳になっている。エイの下に更に一女、二男が得られて（次男伸六はこの年誕生）、合わせて二男四女の子福者になる。少子化の今日とは違い、当時は六子くらいでは「子福者」というほどのものでないかも知れない。「夢」のなかで背負う子供を漱石のことと結びつけて読む必要はない。

「自分」が子を背負って歩くのは、田んぼの中の「だんだん暗くなる」路である。「ほとんど夢中」を歩くが如くである。「左右は青田である」と描写され、鷺がいる。可視しがたい闇の中である。時間的に鷺なども木の繁みに帰巢しているはずである。夢と断られているからこの程度の「不思議」は読み手としても克服できる。子供は盲目だがきちんと状況を読みとっている。鷺の啼き声で判断して「田圃に掛つたね」と言う。「自分」は「我子ながら少し怖」くなる。闇の中に見える「大きな森」に打ち遣ろうかと思う。途端に子供は鼻で笑う。「悪だくみ」は瞬時に察し取られているかのようである。以後「自分」の取ろうとする行為、脳裏を過る瞬時の思念も、何もかもが子供に見通され、予言されていて、あまつさえ

子供の方から「自分」の行動を指示され、支配される。「脊中に小さい小僧が食付いてゐて、其の小僧が自分の過去、現在、未来を悉く照して、寸分の事実も洩らさない鏡の様に光つてゐる」のである。

「自分」の企みを察知して鼻先で笑った「小僧」は、「御父さん、重いかい」と聞き、「自分」が「重かあない」と返事すると、「今に重くなるよ」と予言する。ちよつとの間休憩を取ることになる岐れ道に來ると、小僧は石が立っているはずだと言う。「小僧」の言うとおりに「腰程の高さ」の「八寸角の石」があり、夜目にも明らかな「左り、日ヶ窪、右、堀田原」赤い文字が見える。その文字の赤さを「井守の腹の様な色」と形容し、不気味さを添える。道標の「日ヶ窪」「堀田原」については、漱石の幼時体験のうちにあるものとしての指摘がある。⁽⁸⁾ここでも「左が好いだらう」と小僧は命令し、少々躊躇する「自分」に、小僧は「遠慮しないでいい」と含みのある言い方をする。「何だか厭にな」って「早く森へ行つて捨てて仕舞はふ」と急ぐ「自分」に、小僧は「もう少し行くと解る。——丁度こんな晩だったな」と独り言のように言う。「何が（解る？）」と際どい声で聞く「自分」に、子供が「何がって、知つてゐるぢやないか」と嘲けり気味に答える。

小僧の言葉に使簇されて、あるいは暗示されて、なんの心当たりのなかつたはずの「自分」は、「すると何だか知つてゐる様な気がし出した。けれども判然とは分らない。只こんな晩であつた様に思へる。分つては大変だから、分らないうちに早く捨て、仕舞つて、安心しなくてはならない様に思へる」ようになる。もはやすっかり「自分」は、小僧の葉籠中のものになっている。この後に先引用部分——「其の小僧が自分の過去、現在、未来を悉く照」らしだしているとの引用部分が繋がる。その「何か」を自分で分かることができるか、あるいは小僧に教えられる前に子供（小僧）を捨てなくてはならない。いずれが先になるか、最後の修羅場への道行がこの虞初の展開部である（実際に「修羅場」が生じたかどうか、それは不明である）。「自分」には、小僧の仕掛けから、その「何か」が、「自分」にとって快からぬこと、自己を危殆に陥れかねないことだけはうすうす予期されざるを得ない。思いも寄らぬ「不思議」に包まれ、不可知な事態に向かっている

懼れを抱く。戦々恐々は言い過ぎにしても、親父としての権威も尊厳もなくなる。「それが自分の子」「盲目である」に違いないはずなのに、子供（小僧）からいっさいを差配され、従わざるを得ない不様に「自分」自身が「湛らなくなつた」臨界状況に至らんとするのが「第三夜」の展開部である。

三

子供をおんぶしたまま「自分」はいっしか森の中に入っている。小説の構成で言えば、結末部に入る。「此處だ、此處だ。丁度其の杉の根の處だ」と小僧は叫ぶ。歩を止めた「自分」に、「御父さん、其の杉の根の處だつたね」と小僧は言う。「うん、さうだ」と思わず答えてしまう「自分」。以下、こう続けられる。

「文化五年辰年だらう」

成程文化五年辰年らしく思はれた。

「御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」

自分は此の言葉を聞くや否や、今から百年前の文化五年の辰年のこんな闇の晩に、此の杉の根で、一人の盲目を殺したという自覚が、忽然として頭の中に起つた。

『夢十夜』執筆の明治四十一年を現在とすると、その百年前はまさしく文化五年である。西暦で言うと西紀一九〇九年と一八〇八年である。またしても「百年」である。「第一夜」で、臨終の女が看取る男に百年待てば必ず会いに来ると盟う。ここはすでに百年前の過去の（実際にあったとしての）、それまでまったく自覚のなかつた殺人事件が、記憶の暗闇から、心の洞窟から、「小僧」の言うが儘に呼び出されるのである。

百年前、「御前（自分）」が「おれ（小僧）」を殺したと、小僧は責める。すると「自分」は、「今から百年前の文化五年

の辰年のこんな闇の晩に、此の杉の根で、一人の盲目を殺したという自覚」が生じたと言う。記憶の地底に眠る「原石」のような犯罪が掘り起こされたのではない。なんとなくそういうふうに見えるせられ、どうやら小僧の言うとおりだという程度である。「百年」には、どんな意味があるのか。現行の刑法の最重量刑の時効に数倍する時間である。西洋暦の百年は一世紀に当たる。十九世紀最後の年（一九〇〇）に留学した漱石は前の世紀の末をパリ、ロンドンを中心に体験している。特にパリを中心とする世紀末思潮のその時期に行き遭っている。日本にいるよりも少なくとも世紀の終焉、更新を意識したはずである。が、書簡等にはその反応は窺えない。延びたとは言え今日の平均寿命は百年にまだまだ及ばない。が、百齡を超える人はほとんど増えている。百年は決して長くないのかも知れない。当時、遙かな将来と思えた植民地的侵略の租借地、厚門や香港も百年を経て、今日すでに返済されている。英国などの貸し地、日本でも別荘地の賃借は百年、十九年が単位である。百年は永久ないし無期限に近く、厚門や香港も期限が来たら契約の延長は容易いものと考えられていたに違いない。

「第一夜」の場合は、永久に等しい「百年」に保証し難い愛の誓いをかけたのであり、「第三夜」の場合も、百年という、遙かで朧気な過去から立ち頭われて来る罪証、知覚しえない悪業が、もともとは身に覚えもない時点としての「百年」であった。この場合、たまたま執筆した明治四十一年から数えたら「文化五年」であつたらう。「文化五年辰年」について意味づけも為されているが、執筆が前後すれば文化五年を挟んで前後に揺れ動く性質のものであつたとしたい。いずれにしても身に覚えのない、言い掛かりに近い過去の古傷に思い掛けず切迫される人という存在には慄然とせざるを得ない。殺したかも知れない人間、そして今背負っている盲目の子供を厄介と思ひ捨てようとする人間と、百年前に「自分」に殺されたらしい人間が、窮極にはたどり着く場所がその状況とも合わせて偶然にも一致する、その恐ろしさ。百年前も、そして夢の現在も、盲目の人を足手まといに思い遺棄しようとする、悪を働く人間がまったく同じ手順、行路を踏み、辿る。

その一致にこそ慄然としたものが生じる。ある種の〈戦慄〉がある。

「第三夜」は、前掲文に続けて以下のように結ばれる。一部は重複させて引用する。

「御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」

自分はこの言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな晩に、この杉の根で、一人の盲目を殺したと云ふ自覚が、忽然として頭の中に起つた。おれは人殺しであつたんだと始めて気が附いた途端、脊中の子が急に石地藏の様に重くなつた。

「今に重くなるよ」という小僧の予言どおりになる。「自分」が小僧を打擲したり、あるいはこのたびも殺める、また逆に小僧が「自分」に復讐する、起こつたかも知れないそうした「修羅場」は描かれなかつた。つまりはそこで夢が終わつたのであろう。時にそうである場合もあるが、現実と夢とはいつても地続きではない。夢は常に現実の反映とは限らない。物語は「こんな夢を見た」で始まるが、夢は夢で終わり現実とは別次元である。夢を現実の次元に持ち込んだり、現実を夢で解釈することがすべてではない。多くの場合は、どんなに悲惨な、どんなに過酷な夢を見ても、目が覚めれば夢で良かったと胸を撫で下ろすのが普通である。「第三夜」も、夢でしか描きえない「不思議な事」として味わえばいいのではないか。そして、稿者はいま、従来から成されてきた「第三夜」の読みとは大幅に、否まったく異なる新たな読み、受容を加えたい。提示したい。「自分」が背負う「脊中の子が急に石地藏の様に重くなつた」のである。一塊の石ではないのである。背負っているゆえ見えないが、つまり背の中の子が「地藏」に変じたのである。「一人の盲目を殺したという自覚」が生じた「途端」、背中の子は「自分」を救済したのである。贖罪の機を与えたのである。「途端」という語の機能がそれを示唆する。そしてまた己自身も「成仏」し得たのである。更に言えば「地藏」が小僧に身を変えて、「自分」を記憶の彼方の犯したかも知れない「人殺し」の場へ誘つたのかも知れないのである。小僧が地藏の化身だとすれば、「親」であるはずの「自分」

に対して大人びた言葉を使い、「対等」——否むしろ「対等」以上にあれこれと行動を指図し、「自分」のことについて、さまざまに、万事お見通しであったのも強ちではなかったと首肯できるのである。こう理解すれば、あるいは理解へのコードを持たば「第三夜」の話の中のもろもろの「不思議」は、すべて不思議でなくなる。不審は瓦解する。

明治四十一年の発表以来、さほど注目され、論究されて来なかった『夢十夜』が、戦後の〈実存主義〉上位の時代に伊藤整、荒正人によって解釈評価の先鞭が振られたために、人間の潜在的な〈罪〉意識、あるいは原罪的なものの剔抉が漱石によってなされていたとの見方が方向づけられ、定着したと考えられる。⁽¹⁰⁾〈父母未生以前〉もむしろ輪廻転生の理念で思考すべきかも知れない。だからこそ「石地蔵」なのである。いま「私」という存在もどこかで人を殺傷した、あるいは欺いたものの生まれ変わりかも知れないのである。

「第三夜」では「修羅場」が描かれなかったと同様、その逆も書かれていない。しかし如上の方向性で「第三夜」を読むことは、「第三夜」の結末部の方向に沿う自然性を持ち得るのではないか。⁽¹¹⁾あながち無謀な読みとも思わない。かく理解し得たら、『夢十夜』『第三夜』の受容は、百八十度転換するコペルニクスの転回を遂げることになる。稿者には奇を衒うつもりは毫もないのである。

〈付記〉 『夢十夜』本文の引用は 新書判『漱石全集』（第十六卷 岩波書店 一九五六年一二月刊）に拠っている。なお『漱石全集』第十二卷（岩波書店 一九九四年一二月刊）をも参照している。引用にあたっては、漢字は常用字体に改めている。またルビは極力省略している。

〔注〕 以下注記にあたっては、文献の刊行年を便宜上西暦に統一している。

〔1〕 『夢十夜』は、東西両朝日新聞に一夜ずつ掲載。ただし「第一夜」は東京朝日には明治四十一年七月二十五日、大阪朝日には七

月二十五日に発表、以後二十七日から一夜ずつ八月五日まで連載。その間、朝日の東西朝日両紙とも八月一日の休載を挟む。

この間の経緯については、鳥井正晴『『夢十夜』研究(一)』(『日本文芸研究』第三〇巻第三・四号 一九七八年十二月 関西学院大学日本文学会刊)に詳しい。

(2) 『夢十夜』「第一夜」及び「第二夜」については、下記に拙稿がある。

今西幹一「夏目漱石『夢十夜』「第一夜」の文芸構造―『夢十夜』考 その一―」(『関西学院大学日本文学科開設五十周年記念論文集 日本文芸研究』関西学院大学日本文学会 一九九二年九月刊)

今西幹一「夏目漱石『夢十夜』「第二夜」の文芸構造―「悟り」に近づきながら悟れぬ男―」(『日本文芸学』30号 一九九三年一月) 日本文芸学会発行)

(3) 伊藤整「『夢十夜』解説」(『夢十夜』 光文社 一九二七年二月刊)

荒正人「漱石の暗い部分」(『近代文学』8巻11号 一九五三年二月刊)

(4) 伊藤整・荒正人流の『夢十夜』の読み方に対して、相原和邦氏は「このようなバタ臭い概念のみで解明するのが、果たして妥当かどうか」と異義を呈している。氏は続けて「日本の伝統的な精神風土や文学遺産の中に、この作品の祖型を探し出すことができないものか」と言う。先行研究では「祖型探し」は時間を遡り、日本はもとより洋の東西を問わずさまざまになされている。本稿は、そうした「祖型探し」に加担せず、「バタ臭さ」を離れて新たな〈読み〉を加えるのが意図である。また、一々列挙しないうちが多くの諸論をこの度読みなおし、最近の論者が伊藤整・荒正人の解から「距離」を置き始めていることを実感として確かめ得ている。なお、相原和邦の論については「注(6)」に注記している。

(5) 典拠ないし材源への調査、考察は古今東西に及んでいる。敢えて枚挙しないでおく。本稿は「第三夜」をテキストとして穿鑿し、純粹に漱石の意図したものの別括をはかろうとしたものである。

(6) 無量の『夢十夜』論に加えて二十数件の「第三夜」論を読んだかぎりには、伊藤整、荒正人説を大幅に超え得ていないように見受けられる。相原和邦氏も、江藤淳の「漱石内部のカオスの世界」の読みまで含めて、「現在に至る評家の論も、おおむね伊藤説―荒説の延長線上にあると言えよう」と述べる。

相原和邦『漱石文学の研究―表現を軸として―』(『夢十夜』試論―第三夜の背景) (明治書院 一九九一年五月刊)

(7) なお『夢十夜』は、引用全集では「小品」として巻立てを行い収録されている。

(8) 大竹雅則『漱石 その遐なるもの』(『夢十夜』第三夜・第九夜) (おうふう 一九九九年四月刊)

同書で大竹氏は清水孝純氏の所説(『夢と固有名詞』 漱石全集12巻月報12 岩波書店 一九九四年二月刊)を引き、「日ヶ窪」「堀田原」が養父宅の生活圏にあり馴染の地名であることを指摘している。なお大竹氏の指摘により、見落としていた全集月報所載の清水論文を確認している。

(9) 水谷昭夫『漱石文芸の世界』(『漱石的深淵の開示 『夢十夜』の恐怖と意味) (おうふう 一九七四年二月刊)

「父親殺し」荒正人説を敷衍する氏は、荒氏が「父」が「子供」であるのは、「夢」にしばしば見られる単純な倒錯とみるのに対して、なぜ「倒錯」が起こったかが重要であるとし、その謎を解く鍵として「文化五年辰年」に求める。委細は同書に依ってもらうしかないが、やや「付会」気味の要素がないではない。同学である同氏は我々近代文芸研究の先駆であり、右論稿は初出(『国文学』14巻5号へ一九六九年四月号) 学燈社刊) 段階で読んでいる。

(10) 伊藤整や荒正人のかような『夢十夜』の読みが、その後の『夢十夜』解釈をミスリードしたとは言わない。むしろ時代に適った読みなのだとし、作品『夢十夜』自体にそのような〈読み〉を招来せしめるような要素があることを認めるにやぶさかでない。

(11) 本稿は今から十数年前、二松学舎大学文学部国文学科「近代文学演習①」ゼミで半期に亘って『夢十夜』を研究し、学生の報告に合わせて当方の〈読み〉を示したのが基礎になっている。今回、可能な範囲でその後の『夢十夜』と「第三夜」に関するその後の諸論攷に眼を通して見る。